

「経営情報イノベーション研究」巻頭言

経営情報イノベーション研究科長
八木 健 祥

自走の教え

早いもので2022年度の授業も後期が始まった。学部生は卒業論文、院生は修士・博士論文の執筆にエンジンがかかってくるタイミングであるが、学部生の中からは、「あと半年我慢すれば勉強もおしまいだ」といった声が聞かれてくる。

私は生涯勉強は継続的に行うものであり、大学での学びはそのスタートラインだと思う。DXの例をみても、これだけ内外のビジネスを巡る環境変化のスピードが速く、イノベーションが次々と生み出される時代にあっては、学生時代に学んだことをストックしておけば残りの人生不自由しないというものではない。大学時代に学んだことをベースに、社会に出ても世の中の流れに敏感に反応し、勉強を通じて新しい知識を絶えずインプットしていく姿勢が求められる。そのためには大学4年間で多くの学びの中から自分の興味・関心のある分野を探し出し、その分野の延長線上に就活があり、企業人としてその分野の専門的知識に磨きをかけていくといったキャリアプランを大学は学生に教えていく必要がある。すなわち「自走の教え」である。社会に出たら、身近に教員がいない分、自分で計画的に継続的に学びができる習慣を涵養させていかなければならないと思う。そして、自己研鑽では超えられないハードルがあるなら、大学院に進学してそこをクリアしていく。企業経営者は目先の利益ばかりにとらわれることなく、産学連携によるキャリアプログラムを構築し、必要な専門的知識を持った人材を育成していく必要があるのではなかろうか。

さて、今回の紀要には、院生2名の方の論文を収録した。いずれの論文も実践的な研究という意味では素晴らしい成果であり、今後こうした研究の成果が個人にとっても勤務先事業所にとっても大きな財産となるであろう。本研究科が人材育成を通じて企業の成長に若干でも貢献できていくのであれば嬉しいことである。

私の居宅の近隣に大きなパチンコ店がある。毎日帰宅時間帯になると多くのサラリーマンがあの独特の電光掲示と照明に誘われて吸い込まれていく。日中、ストレスを感じ息抜きしたい気持ちもわからなくはないが、1週間に1度でもその時間を学びに振り向けてくれたら経済大国日本の未来は明るくなると思うのは私だけであろうか。